

日本18世紀学会第28回全国大会  
プログラム  
報告要項

2006年6月10日(土)、11日(日)

広島大学  
東広島キャンパス  
〒739-0046 東広島市鏡山1-2-2

## 第28回大会プログラム

### 第1日 6月10日(土)

発表会場 広島大学学士会館 2階 レセプション・ホール

9:30 受け付け開始

10:00-10:05 開会挨拶

#### 自由論題報告

10:05-10:55 自由論題報告(1)

「理想とは理念であると同時に事実である」

——理想概念をめぐるカントとFr・シュレーゲル」

田中 均(学術振興会特別研究員・神戸大学)

司会：嶋田 洋一郎(九州大学)

10:55-11:45 自由論題報告(2)

「他者」としてのオスミン

—モーツァルトの《後宮からの誘拐》における終結ヴォードヴィルをめぐる—」

松田 聡(大分大学)

司会：濱下 昌宏(神戸女学院大学)

11:50-12:50 総会+昼食\*

総会会場 学士会館 2階 レセプション・ホール

13:10-14:00 自由論題報告(3)

「英国18世紀半ばのジェントルマン建築家サンダーソン・ミラーによる人工廃墟建築」

豊口 真衣子(東京大学)

司会：相澤 照明(佐賀大学)

14:00-14:50 自由論題報告 (4)

「18世紀後半フランスにおけるイギリス・モード シャルトル公を中心にー」  
西浦 麻美子 (お茶の水女子大学)  
司会：野口 榮子 (関西学院大学)

14:50-15:10 コーヒー・ブレイク

15:10-16:00 自由論題報告 (5)

「ライプニッツの『楽観主義』とデイドロ」  
フォヴェルグ・クレール (名古屋大学)  
司会：逸見 龍生 (新潟大学)

16:00-16:50 特別講演

“Laughter and Mirth: the British Gentlemen’s manners in the Eighteenth Century”

キム ジョンヒ  
金 定 姫 (韓国18世紀学会会長・韓国カトリック大学)

司会：長尾 伸一 (名古屋大学)

17:00-18:00 コンサート

会場： 学士会館 2階 レセプション・ホール

司会・解説、伴奏...坪北紗綾香 (作曲家)

出演： ソプラノ...Elisanta Gregorio Cortes (エリザベト音楽大学大学院在)  
古琴...陳貞竹 (広島大学大学院博士課程在、台北藝術大学卒)  
ヤトガ...弓暁寧 (エリザベト音楽大学大学院修了)  
箏...木原朋子 (エリザベト音楽大学在)

主な曲目： 第一部 (アジアの声楽曲) レロンレロンシンタ  
ダンヒルサヨ

第二部 (古琴とヤトガと箏の響き) 作曲者不詳「陽関三疊」(古琴)  
光崎検校作曲「秋風の曲」(箏)

18:15-20:15 懇親会

会場 学士会館 1階 レストラン ラ・ボエーム  
会費 5000円

## 第2日 6月11日（日）

発表会場 広島大学学士会館 2階 レセプション・ホール

9:30 受け付け開始

### 自由論題報告

10:00-10:50 自由論題報告（6）

「J. A. シャイベの『批判的音楽家』における Nachdruck について」  
堀 朋平（東京大学）  
司会：荒川 恒子（山梨大学）

### 共通論題 「礼（儀礼・礼儀・作法）を通して見る文明観」（仮題）

11:00-11:15 趣旨説明

コーディネーター兼総合司会  
青木 孝夫（広島大学）

11:20-12:00 基調報告

「しつけと笑い — 前近代日本文明考」  
横山 俊夫（京都大学）

12:00-13:00 昼食\*

13:00-13:35 第2報告

「礼教」の滲透・展開とその位相——中国を中心とする近世東アジアの事例から」  
伊東 貴之（武蔵大学）

13:35-14:10 第3報告

「朝鮮時代の礼学と礼楽思想」

ミン ジョンシク  
閔 周植（韓国・嶺南大学）

14:10-14:45 第4報告

「文明の作法－初期近代ブリテンにおける政治と交際－」

木村 俊道 (九州大学)

14:45-15:00 コーヒー・ブレイク (質問書回収)

15:00-16:00 討論

16:15 閉会挨拶

\* 10日(土)、11日(日)のお弁当をご希望の方はお申し込みください。大学周辺には飲食店やコンビニエンス・ストアがありますので、お弁当を希望されない方は各自でお取りください。

お弁当代：1000円

## 自由論題報告

会場 広島大学学士会館 2階 レセプション・ホール

### 「理想とは理念であると同時に事実である」 ——理想概念をめぐるカントと Fr・シュレーゲル

田中 均

(学術振興会特別研究員・神戸大学)

本発表は、Fr・シュレーゲルが一七九八年に雑誌『アテネウム』で公にした断片に見られる、「理想とは理念であると同時に事実である」という表現を出発点として、十八世紀末のドイツ語圏の思想における個性の問題を検討する。

上記の表現は一見すると、シラーの『素朴文学と情感文学について』（一七九五・九六）における理想概念を批判したものと解釈できる。シラーはこの論考で、理想を表現することと個性を表現することを相容れないものとして捉えているが、彼の美学の理論的前提であるカントの批判哲学では、理想は「理念によって規定された個物」と定義されている。シュレーゲルは、カントを参照することで、シラーの個性性を欠いた理想概念を批判していると理解できる。

しかし、シュレーゲルが理想を同時に理念かつ「事実」と規定したことに注目すると、彼がカントの理論的枠組みも踏み越えていることが明らかになる。カントは『純粋理性批判』（一七八一）において、伝統的な形而上学における個性化の原理である「汎通的規定」の関係によって、理念と理想とを厳密に対応させる一方、理想の「客観的実在性」を否定し、理想を芸術によって表現することの不可能性を主張する。『判断力批判』（一七九〇）では逆に、芸術における理想の表現可能性を肯定するが、その代わりに理想と理念との関係づけを受容者の連想に委ねていると考えられる。

これに対してシュレーゲルは、理想を「恋人や友人」として、すなわち自我と親密な関係を持つ具体的な他者として捉える。また理想について思考・表現する自我のうちには潜在的に宇宙全体が含まれており、それは多数の人格の集合体であるとも述べる。

こうした議論の意味は、彼が数年後に『哲学の発展』講義（一八〇四・〇五）で展開した自我論を参照することで明確になる。それによれば、自我もその周囲の世界も原自我から派生した断片であり、ゆえに本来世界の一切の個性が自我に類似した「汝」であり、また個体的な自我は原自我の理念的な全体性を「想起」することができる。

この理論を踏まえると、さらに『アテネウム』断片集でシュレーゲルが提唱する「共同文学」・「共同哲学」の意味も理解される。他者が硬直した「物」ではなく創造的精神を持つ「汝」であることを認め、それに呼応して自らも創造すること、このことによってはじめて自我と世界との断絶が乗り越えられ、個性でありながら全体性へ

接近することが可能になると彼は考えるのである。

「他者」としてのオスミン  
—モーツァルトの《後宮からの誘拐》における終結ヴォードヴィルをめぐって

松田 聡  
(大分大学)

サイードのオリエンタリズム論を踏まえ、18世紀の代表的な「異国オペラ」であるモーツァルトの《後宮からの誘拐》(1782年)に新たな光を当てるのが、本発表の目的である。具体的には、トルコ人オスミンが、単に個性的で喜劇的な異国人としてではなく、まさに「他者」として描かれており、その描写と作品全体の思想表現とが密接に結びついていることを、とくに終結ヴォードヴィル(第21a番)の分析を通じて論じる。

《後宮からの誘拐》は、ブレッツナー執筆の台本を原本とするが、結末には大きな変更が施されている。原本では太守ゼーリムが主人公ベルモンテの父親であると判明し、問題が一挙に解決するが、モーツァルトのオペラでは、太守はベルモンテの父親の仇敵であり、彼の寛容な赦しがドラマに終結をもたらす。この変更により、オペラの結末には思想的性格が付加され、その性格が、終結曲であるヴォードヴィルにも反映することとなった。

ヴォードヴィルでは、まず4人のヨーロッパ人たちが、太守への感謝の気持ちを定式どおりに歌っていく。しかし、その定式はオスミンの歌う段になって崩れ、彼は第3番のアリアの終結部分を再現しつつ、怒りの感情を爆発させて退場する。ここでは、音楽の構造的規範からの逸脱という手法により、オスミンの「他者性」が明確に示されている。

一方、ヨーロッパ人たちは、その後をうけて、トルコ人の怒りの表現とは対極にあるコラール風の美しい音楽で、太守の行いに認められる高貴な人間性を讃美する。理念的な内容の歌詞と、それにふさわしい音楽とにより、モーツァルトのオペラで初めて、終結曲が実質的に思想表現の担い手となったのである。その部分はまた、後の《フィガロの結婚》等を予告するものとしても、彼のオペラ創作の系譜の中で、きわめて重要な位置にある。

その理念の表現は、「他者」としてのトルコ人オスミンを陰画としてなされていた。《後宮からの誘拐》の終結ヴォードヴィルは、「西洋と東洋」「音楽の内と外」に関する当時の表象の端的な縮図でもある、ユニークな楽曲なのである。モーツァルトが「異国オペラ」を作曲する際に、オリエンタリズムの枠組みの中にいたのは否定できない。むしろ、その価値体系そのものに音楽的なかたちを与え、効果的で説得力のあるアンサンブル楽曲を作り出した点に、まさしく彼のオペラ作曲家としての力量と特質が現われているのである。



## 英国 18 世紀半ばのジェントルマン建築家サンダーソン・ミラーによる 人工廃墟建築

豊口 真衣子  
(東京大学)

18 世紀にはピクチャレスク、ロマン主義、ゴシック・リヴァイヴアルの興隆がみられ、そのなかでも廃墟崇拜とも呼べる現象が生じ、人工廃墟建築を地所の庭園のなかで点景建築として建てるのが流行した。イギリスでは 16 世紀にヘンリー 8 世により修道院解散が行われ、修道院廃墟が元々多く存在し、18 世紀には失われた中世を求める運きから廃墟崇拜とゴシック建築が結びつく。なかでもジェントルマン建築家サンダーソン・ミラー (Sanderson Miller, 1716-80) はゴシック様式を得意とし、彼の人工廃墟建築は 18 世紀半ばにおいて大きな流行をみた。本研究では、彼が手がけたウォリックシャーのラドウェイ・カースル、ウスターシャーのハグリー・カースル、ケンブリッジシャーのウィンポール・カースルを主な考察対象とし、18 世紀半ばの廃墟崇拜においてミラーが果たした役割を明らかにすることを試みる。ウィンポール・カースルはミラーが最初設計案を提出したが、のちにランスロット・「ケイパビリティ」・ブラウンの監督下で建築家ジェイムズ・エセックスが完成させたことが明らかとなっているが、ミラー風の廃墟が模倣され流行したよい例であるため、分析対象に加える。なおここで用いる「人工廃墟」とは本物の廃墟ではなく、廃墟らしくあらたに建造された建物を指す。

これまで 18 世紀のゴシック様式の提唱者としては、ホレス・ウォルポールを中心に語られてきた。ウォルポールとミラーではゴシック様式におけるアプローチ法において相違がみられ、具体的にはウォルポールは実際の中世建築に範を求めたのに対し、ミラーはバティ・ラングレイのパターン・ブックからデザイン源を求めた。ラングレイは多くの建築書を出版し、彼の建築に関するパターン・ブックは建築様式の伝播に大きな影響を及ぼした。このような相違こそあれ、18 世紀半ばにおいてウォルポールとミラーはゴシック様式の権威と考えられていた。しかしミラーに関しては、一次資料の発見が 20 世紀後半になるまで遅れたことと、従前のイギリス建築史研究における 18 世紀のゴシック・リヴァイヴアルの見方から、ウォルポールに比べて極めて研究蓄積が少ない状況にある。そこで本研究ではミラーに焦点をあてることで、18 世紀のゴシック・リヴァイヴアルと廃墟崇拜を再考することにより、従前のイギリス建築史研究に新しい方向性を与えたいと考える。

## 18世紀後半フランスにおけるイギリス・モード — シャルトル公を中心に —

西浦 麻美子

(お茶の水女子大学大学院)

18世紀後半のフランスを席捲したアングロマニー（英国心酔）は、絢爛豪華なフランス宮廷モードに対してシンプルな略装モードをもたらし、これは19世紀市民服のさきがけになったといわれている。フランス革命前後の服飾の急激な変化は、このイギリス・モードに民主主義的、革命的性格を付与させる結果となった。しかしながら実際に、18世紀当時のイギリスかぶれたたちの私生活を見ると、それが必ずしも民主主義モードとはいえなかったことがわかる。

18世紀末、「王国一のイギリスかぶれ」として知られた人物が、シャルトル公（ルイ・フィリップ・ジョゼフ 1747-1793）である。血統と美貌と財産とに恵まれた彼は、乗馬や競馬、イギリス式庭園などの流行の先導者として手本を示した。また、彼の周りに集まったイギリスかぶれの大貴族たちは、そろって王権に批判的な態度をとり、ヴェルサイユの宮廷に対立するパリの宮廷という構図を作り上げた。反抗精神とアングロマニーとが結びつき、敵国ファッションが政治的意味をおびるようになった背景はここにある。

フランス貴族が手本としたのはイギリスの地主階級ジェントリの服装であったが、「イギリス服」として流行した暗色毛織物のジャケットやコートの、装飾を排したシンプルさは、素朴な農民の姿を連想させた。それは労働者、御者の格好であり、貴族の衣装としてふさわしくないことから反抗的意味をもち、また表面上の画一化はデモクラシーの実現とも見えた。確かに、革命後に出版された回想録の多くは、イギリス・モードに革命の予兆のようなものを見いだしている。

しかし、ファッション・プレートから、革命前10年間のイギリス・モードの変遷をたどってみると、必ずしもそれが簡素とは言い難く、フランス風に洗練されていくのがわかる。さらに民主主義とは矛盾する、イギリスかぶれたたちのエリート趣味も指摘できる。大貴族たちによるイギリス平民服の採用は、むしろヒエラルキーを保持するための手段であり、貴族趣味のモードであったといわねばならない。

## ライプニッツの『楽観主義』とデイドロ

フォヴェルグ・クレール  
(名古屋大学)

「人間は真実の発見より、むしろ間違いによって自分の才能を証明する場合がある。ライプニッツの『予定調和』あるいは『楽観主義』は、世界中の神学者の著書よりも、また幾何学、力学、天文学のいずれの最大な発見よりも、優れた思考を示すと思われる」<sup>1</sup> とデイドロはライプニッツを礼賛する。

ここで百科全書家が指している「楽観主義の体系」<sup>2</sup> にはどのような哲学的な問題点があるのか。それを考える上で、デイドロが百科全書の「ライプニッツ主義あるいはライプニッツの哲学」<sup>3</sup> 項目を執筆した際に、『弁神論』と同時に出版されたライプニッツの著書 *Causa Dei*<sup>4</sup> をラテン語からフランス語に翻訳したことを忘れてはならない。

デイドロは、学識豊かな翻訳に哲学的な解釈を加えている。このライプニッツのテキストの読解を契機に、特有の唯物論を唱えるデイドロは、ストア学派の *fatum* 観念を始めとする 運命論を取り上げ、最も決定的な事柄が実現するという「最善原理」によって「必然性」の概念を新たに定義し直すことになった。こうしてデイドロは人間が高めなければならない最善あるいは最適の知恵の体現モデルとして見なされる「自然」の大義を弁護するのだ。その知恵は、自然の理法と理法が含む可能性に対して、あるいは人類全体と未来の幸福の可能性に対して、人間がある種の感性を持ちうることを想定する。

本発表は本年刊行予定の『ライプニッツの読者かつ解釈者としてのデイドロ』<sup>5</sup> の一部を論ずる予定である。

---

<sup>1</sup> Diderot, *Réfutation d'Helvétius*, 1773-1777, DPV XXIV, 594.

<sup>2</sup> D'Alembert, *Encyclopédie, Discours Préliminaire des éditeurs*, 1750.

<sup>3</sup> Diderot, *Encyclopédie, LEIBNIZIANISME ou PHILOSOPHIE DE LEIBNIZ (Hist. de la philosophie)*, 1765, *Principes de la théologie naturelle de Leibniz*, DPV VII, 702-704.

<sup>4</sup> Leibniz, *Causa Dei*, publiée à la suite des *Essais de Théodicée*, Amsterdam, Isaac Troyel, 1710.

<sup>5</sup> Claire Fauvergue, *Diderot, lecteur et interprète de Leibniz*, Paris, H. Champion, 2006, à paraître.

## J. A. シャイベの『批判的音楽家』における Nachdruck について

堀 朋平  
(東京大学大学院)

主著『批判的音楽家』(ライプツィヒ、1745年)で知られるヨハン・アードルフ・シャイベ(Johann Adolph Scheibe, 1708-1776)は、複雑なポリフォニー音楽を非難し、明瞭な旋律と伴奏からなる音楽のあり方を称揚した人物として、またルソーに先立つ「旋律」の賛美者として、しばしば位置付けられている。だが、一方でヴォルフとゴットシェートの用語法を踏襲する彼は、音楽のあらゆる成り行きを統御しようとする「理性」重視の古典主義者でもあった。作曲家の「自由」の擁護と、規則からの演繹による桎梏という二義性が、彼の音楽論においてどのように現れているのかを問い直すことが、本発表の目的である。

上記のような二義性が明瞭に見て取れるのは、旋律と和声の関係においてである。すなわちシャイベは「旋律」を、人間の「傾向性」の源である「音楽の第一の根源」として称えながらも、その「いかなる規則も介入できない」はずの旋律に対する「義務」ないし和声的「後押し(Nachdruck)」の必要性を説くのである。こうした二義性は、着想と書法との関係にも直結する。シャイベは、「着想 - 配列 - 彫琢」という修辞学の一般的な三階梯は「着想」と「書法」との混交を招くものであるとしてこれを拒絶し、「書法」に対する「着想」の独立性を擁護する。だがそれにもかかわらず彼が「[着想に]先立つ諸部分(Vortheile)」として強調するのは、妥当な旋律を案出するための外的条件への顧慮という伝統的様式論の枠組みを出ない、むしろ「書法」の優位であり、さらには「想像力」に対する「理性」の優位であった。想像力の抑制はさらに、「危険な高み」へと向かう「崇高」な「高様式」の抑制とも通じている。シャイベの音楽論において「後押し」とは、自然で理性的な表現からの逸脱を統御するという枢要な役割を担うものだったと見ることができるであろう。

こうして見たとき、17世紀初頭以来の伝統がもはや解体しつつあった音楽修辞フィグーラ(文彩)の理論を独自の文脈において位置付け直し、フィグーラを「音楽の書法に最大の後押しを与える」ものであると述べたシャイベの意図が浮かび上がってくる。当時としては先鋭的な数々の音楽語法を列挙しつつも、フィグーラの「内的本質」として楽曲の「全体的連関(Zusammenhang)」の遵守を強調するシャイベは、自由で奔放な個々の表現を統御すべき〈全体性〉への配慮を、作曲家に要請していたのである。

## 共通論題 「礼（儀礼・礼儀・作法）を通して見る文明観」（仮題）

会場 広島大学学士会館 2階 レセプション・ホール

### しつけと笑い — 前近代日本文明考

横山 俊夫  
(京都大学)

文明は、古くは、天地にわたるひろがりのなかで意識され、いわば宇宙的な文脈において語られた観念である。文明の核をなすはずの人間の資質やふるまいも、したがって、宇宙の秩序と呼応するものでなくてはならなかった。東アジアの古典に親しむ知識人のあいだには、この偉大なことばの記憶がいまも生きている。

文明ということばが力をもつのは、浮沈のはげしい歴史のなかでみれば、いずれも安定にむかおうとする時期ではないだろうか。そこでは、かぎられた空間のなかで、かぎられた資源とその利用者のあいだの相互依存が密度をたかめつつ維持されようとする。そのからまりあいが、たがいの消耗と閉塞をもたらすことなく、明るさをたもつためには、じつは、さまざまな媒介機能をもつ存在が幅をきかせることが条件となる。身体しかり、衣食住しかり、ことばしかり、神仏しかり。

17世紀末から19世紀なかばの日本は、当時の地上のおおくの国とあえて比べれば、より安定しており、かつ閉塞をまぬがれていた。その状態がつづいた理由を単純な因果関係で説くことは避けたい。ただ、おおいなる媒介機能をもちつづけた出版物二種を見のがすことはできない。節用集と大雑書である。節用集は、俗界の人づきあい、とくに書きことばによる意思疎通のかたちをささえ、大雑書は、天地のいたるところにおわす神仏を人びとがおかすことなく、守りや恵みをうけるためのふるまいを教えた。両書あわせて、いわば総合礼法手引きとしての力を発揮したといえる。

全国に無数にのこる諸本の小口の手沢模様をひとつひとつ観察し記録するほどに見えてきたのは、これらの書物をなかだちとして安定期の社会を生きた人びとの日々のこだわりの諸相である。とくに、御所風へのこだわりの濃淡、五行説にもとづく相性へのこだわりの深淺が、多様な人生模様をあみだしたようである。注目したいのは、礼法について正統と異端の狭量な抗争がまれであったこと。さらに、自他ともに、あれこれと礼にこだわるさまを笑う精神がたえずどこかに生きつづけていたことである。

庶民を広範囲にまきこみながらの、このような礼法文化の展開は、各国の歴史に照らしてやや特異な、あえて申せば、古典的な「文明」の観念につながる側面をも示していたと見てよい。シンポジウムでは、当時の日本の人びとの、アヤをなしアキラカ

なる暮らしのたてようを、すこし分析的に眺めてみたい。

「礼教」の滲透・展開とその位相  
——中国を中心とする近世東アジアの事例から

伊東 貴之  
(武蔵大学)

永らく前近代の中国において、およそ儒教の理念に従う限り、古の聖人の制作に係るとされ、たとえば朱熹(朱子)によって「天理の節文、人事の儀則」と定義づけられた「礼」こそは、いわば自然界の美しい道徳的な秩序である「天理」の、地上における具体的・客観的な顕現として、政治社会を律する「秩序」の核心にほかならなかった。彼らにとって、それは同時に「中華」文明の指標でもあった。

更に、近年の研究では、いわゆる近世中国、とりわけ明清時代(なかでも特に17～18世紀)の儒教を基軸とした基層社会のありかたを「礼教社会」「礼治システム」として捉える見解もある。当時、儒教の教説の理論的なレベルに即するなら、朱子学・陽明学・考証学といった、さまざまな展開が見られたが、その実践的・社会的な側面においては、かかる「礼教」がより広汎な範囲の人びとに滲透していく過程こそが、ある種の「文明化」の進展でもあったと評することが出来る。

しかるに、近代以降、より具体的には民国期になると、そうした社会のありかたや儒教的な「礼」制度は、総じて「封建礼教」、より甚だしくは「人を喰う礼教」(魯迅)として、進歩的ないし革命的な知識人らによって、激しい批判と攻撃に晒され、否定と克服の対象となっていく。この間には、いかなる捩れや屈曲が存在するのであろうか。

また、そもそも一口に「礼」と言っても、大は国家儀礼や王朝の祭祀から、小は冠婚喪祭といった個人の人生の節目における通過儀礼や日常生活のコードなどをも含む、きわめて包括的、広域的な概念であり、制度・実践でもある。より広くは、「礼」の理念にもとづく中華的世界観は、前近代の東アジアの国際関係を相当程度、規定し続けたし、前近代の中国の法・制度・習俗に広く、深く滲透している。『周礼』や『儀礼』といった「礼」に関わる経書をめぐっても、古来、実に多くの解釈が累積されてきた。理念と実態との乖離や齟齬も往々にして現象する一方で、常にそのことが意識化されてもいた。その意味では、「礼」は一面で、些か曖昧で多義的な概念でもある。

だが、一方で「礼」は、前近代の中国の社会や思想文化において、かくも重要な意義を担っていたにも拘わらず、少なくとも日本にあっては、伝統的な漢学をはじめ、近代以降、西洋哲学の概念枠組に比擬するかたちで形成された哲学的な研究、またある種の「近代」主義的な視点にもとづく思想史研究などの何れをとっても、動もすれば等閑視される傾きが存していた。こうした経緯の裡には、ある意味で、日本における中華文明の受容や近代的な学問観の有する問題性が、図らずも集約されているとも言えよう。

本報告では、まず西欧や日本、韓国・朝鮮などとの比較のための参照枠として、かようにも複雑な様相を呈する儒教的・中華的な「礼」や「礼教」をめぐる知見を可能な範囲で整理し、更に近世の李氏朝鮮王朝や日本における事例との若干の比較も試みたい。なお、この点に関しては、儒教祭祀の導入や定着などをめぐって、その背景に、朝鮮・日本のそれぞれの政治社会や習俗の差異のほか、明清の交替(思想文化的にはいわゆる「華夷変態」という、当時の東アジアにおける国際環境の大規模な変化も、同時に影を落としていることにも留意したい。



## 朝鮮時代の礼学と礼楽思想

闵 周植

(韓国 嶺南大学)

朝鮮王朝（1392－1910）は建国の時から儒教国家を標榜した国である。儒教国家の統治理念および統治方法は徳治と礼治である。孔子が、“上から百姓を治めるには礼より良いものはない”と述べた意味は、万民が共有することの出来る秩序の標準であり善の標本が礼であるから、それに正しく適応すればいいということであった。上下、貴賤の区別を厳しく立て、人々がそれぞれの位置を守り僭越、つまり分を越えないようにすること、それが礼に他ならない。僭越を予防する礼の核心的装置が人倫秩序の規範である。人倫秩序とは人間関係の種類に従って上下、貴賤を分け、それらの両者がお互いに和合することの出来る方途を提示することである。その原理の核心は、差別による調和の追求である。

朝鮮時代の礼治に関わる文献は、国家の典章制度に属するものと、一般士大夫の家庭儀礼を中心とするものとに分けられる。前者の代表は『経国大典』と『国朝五礼儀』であり、後者の代表は『朱子家礼』である。

16世紀にいたって本格化された性理学では、礼学が心学と不可分の関係を形成した。また、礼の規範を納めた書籍である礼書が16世紀後半と17世紀前半に多く登場した。特に壬辰倭亂の後、揺らいだ社会秩序の再建と国民の疲弊した心性を回復するため、礼を正しく立て実践する努力が改めて儒学者から始まった。そして18世紀になって李緯の『四礼便覧』が完成し、以後、これが儀礼の標準的規範として通用した。

当時の儀礼において社会的に最も重要視されたものは宗法である。宗法は正統と異端との区別、さらに尊卑、貴賤、長幼、親疎の区別を明確にし、王室から個別の家庭にいたるまで嫡長子の継承・支配を貫徹する、いわゆる中世の家父長的支配体制を維持するための基本原理である。17世紀に発生し、党争を深化させたものに礼訟があるが、そこで問題になったのは、この宗法と正統に関するものであった。

ところで、朝鮮後期の実学者たちの礼学は、その方向と内容において多くの差がある。実学の目標は民生の救世と国富の増大にあった。彼らはこれらの目的を実現するため、為政者を始め官吏と両班士族の倫理的健全性を回復し高揚することの出来る、礼の改善に深い関心を持っていた。そして、冠婚葬祭の簡素化や儒教的風俗の刷新を求めた。

## 文明の作法－初期近代ブリテンにおける政治と交際－

木村 俊道

(九州大学法学研究院)

本報告の目的は、初期近代ヨーロッパを対象として、とくにブリテン政治思想史の観点から、同時代における「文明の作法」civilityの意義を明らかにすることにある。

礼儀や作法は、実は、東アジアにのみ固有の問題群ではない。とくに産業化以前のヨーロッパにおいては、君主の宮廷や文明社会を主な舞台として作法の洗練と再生産が見られた。

初期近代ブリテンにおいて礼儀や作法を意味した語彙群として、*courtesy, civility, politeness, manners, etiquette* 等が挙げられる。それぞれ、宮廷、都市、ポリス、方法、札を語源としている。なかでも、*civility* は文明と同義であり、初期近代における文明と作法との連関を鮮やかに示している。サミュエル・ジョンソンの『英語辞典』(1755)には *civilisation* の項目がなく、代わりに *civility* が採用されていた。ヨーロッパの文明は、*civilisation* 以前の時代においては、むしろ礼儀や作法と不可分であったのである。

本報告では、以上のような「文明の作法」がルネサンス期から一八世紀にかけて持続的に再生産されていた過程を、(1) 宮廷 (2) 作法書 (3) 大陸旅行 (4) 外交 (5) チェスターフィールド、という五つの主題に即して明らかにする。

礼儀や作法は、他者との交際 *conversation* を可能にするための技術であった。その修得はヨーロッパ水準の政治エリート教育に不可欠であった。同時代における文明と政治の中心は大陸の宮廷社会である。辺境の後進国イングランドでは、カスティリオーネの『宮廷人』(1528)をはじめとする作法書 *courtesy book* の翻訳と受容が絶えず行なわれた。また、ジェントルマンの子弟による大陸旅行は、教養を深めるだけでなく、他者との日常的な交際やダンスなどの技芸を通じて「文明の作法」を身体化することを目的とした教育プログラムであった。異国の使節を迎え、他者と交渉し、ともにダンスを踊る宮廷外交の世界はまさに、このような礼儀や作法が高度なレベルで実践される舞台であったのである。

一八世紀の宮廷人チェスターフィールドは、このような「文明の作法」の伝統を代表する人物であった。彼の『息子への手紙』(1774)は、大陸旅行の途上にある庶子スタンホープに向けて *decorum* の必要を繰り返し説いた作品である。

しかしながら、一九世紀以降は作法のマニュアル／エチケット化が進む。礼儀や作法が身体から離れていく。近代文明 *civilisation* の時代はまた、デモクラシーとナショナリズムに向かう時代でもあった。西洋世界と日本との「外国交際」(福沢諭吉)は、「文明の作法」の残照のなかで本格的に開始されたのである。

広島大学東広島キャンパス バス停と学生会館付近の地図

## 広島大学東広島キャンパス全体地図

### 【アクセス（交通案内）】

会場：広島大学（東広島キャンパス）・広島大学サタケメモリアルホール 2 階  
最寄駅：西条駅（JR山陽本線）もしくは東広島駅（JR山陽新幹線）

#### □ JR山陽本線を利用する場合

- JR西条駅前からバス「広島大学」行に乗り、「広大中央口」バス停で下車します。  
(バス所要時間:約 20 分)
- JR八本松駅前からバス「広島大学」行に乗り、「広大北口」バス停で下車します。  
(バス所要時間:約 20 分)  
※ バスの便数は、西条駅からのほうが多いです(通常、1時間に2~3本程度)。  
※ 西条駅からタクシー利用の場合は、所要時間:約 10 分, 料金:1600 円程度。

#### □ 山陽新幹線を利用する場合

- 新幹線東広島駅前からバス「広島大学」行に乗り、「広大中央口」バス停で下車します。  
(バス所要時間 15 分)
- 新幹線広島駅で下車し、JR山陽本線で西条駅まで来るほうが早い場合もあります。  
※ 東広島駅からのバスの便数がかなり限られていますので、タクシー利用が便利です。  
(所要時間:約 15 分, 運賃:2000 円程度)

#### □ 広島空港を利用する場合

- JR山陽本線の白市駅までバスで行き、そこから西条駅まで来ます。  
西条駅からバス「広島大学」行に乗り、「広大中央口」バス停で下車します。

2006年4月発行

日本18世紀学会

113-0033 文京区本郷 7-3-1  
東京大学大学院人文社会系研究科  
美学芸術学研究室内  
Tel/Fax : 03-5841-8958  
voltaire18th@yahoo.co.jp